



●贈呈式が行われた早期胃癌研究会会場●

第13回村上記念「胃と腸」賞贈呈さる

第13回村上記念「胃と腸」賞は次の論文に贈られた。

「胆嚢癌の発育・進展—肉眼型・壁内発育様式・癌の大きさからみて」

内田 克之*1) 渡辺 英伸 味岡 洋一
鬼島 宏 近藤 公男 岩淵 三哉
石原 法子 吉田 奎介2) 白井 良夫

1) 新潟大学第1病理 2) 同 第1外科
(*現 同 第1外科)

「胃と腸」第22巻第5号: 511-521頁, 1987年



●白壁氏より賞状、賞牌を受ける内田氏●

贈呈式は7月20日、早期胃癌研究会7月度例会(東京・エーザイ本社ホール)で行われた。例会幹事の西沢護氏(東京都がん検診センター)より受賞論文が紹介された後、受賞者を代表して内田克之氏が登壇され、早期胃癌研究会代表の白壁彦夫氏(早胃検)より賞状と賞牌が、医学書院の金原優社長より賞金がそれぞれ手渡された。

続いて丸山雅一氏(癌研病院)は“私が大学を卒業したときにちょうど「胃と腸」が創刊され、以来、この雑誌によって自らも育てられた”など自己の「胃と腸」とのかかわりに触れつつ、今回受賞した論文につき講評された。すなわち“消化管のメジャーな領域に比し、いまだ『暗黒大陸』をようやく脱した感にすぎない胆嚢系の知見の中で、内田氏らの研究が胆嚢癌の早期発見という点で臨床に大いに貢献したこと”を述べ、更に村上忠重先生らによって興された“クラシックな形態学”を舞台にしつつ、これを発展させていく責務が若手研究家・臨床家にあることを述べられた。

最後に、受賞者の内田氏が挨拶。“喜びと驚きと戸惑い”の感情を披瀝しつつも、受賞の背景には、新潟大学第1病理教室の共同研究者でもある渡辺英伸教授をはじめとした「輪」の日夜を分かたぬ努力があったことについて述べられた。同氏は“今後ともこの「輪」で難治の胆嚢癌に立ち向かう”と決意を述べ、立錐の余地もない会場の聴衆からの拍手を受けながら受賞式は終了した。



●受賞の弁を語る内田氏●

●選考経過を述べる丸山氏●

●祝詞を述べる白壁氏●